

国際人「ヒロ」の連続登山—— 2004 年春～夏の記録から

江本 嘉伸



(左)「私の登山はみなさんの旅行と同じ」と竹内。(右)シシャパンマ南西壁



2004 年 (平成 16 年)
10 月号 (No. 713)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目 次

国際人「ヒロ」の連続登山——	
2004 年春～夏の記録から……	1
100 周年ニュース……	4
海外の山……	5
報告……	6
自然保護／事業／つくも会／ アルパインフォトビデオ	
東西南北……	9
第 8 回ミセス・ウェストン祭 ／マライーニさんの死去を悼 む／マライーニ写真展の追憶 ／短歌・神室の尾根にて／俱 知安で 100 年前に発足した蝦 夷富士登山会／ミッテルレギ・ アイガー中間地点からの退却 ／K2 登頂 50 周年の関連情報	
Climbing & Medicine・38……	13
図書受入報告……	13
英国エヴェレスト財団……	14
INFORMATION……	15
ルーム日誌……	15

▶ 日本山岳会事務 (含図書室) 取扱時間
月・火・木 …… 10～20 時
水・金 …… 13～20 時
第 2、第 4 土曜日 …… 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 …… 10～18 時

若手登山家の中でも、ユニークな世界を広げている竹内洋岳 (ひろたか・34・日本山岳会会員) の「HAM 計画」といっても、えっ? という方が多いだろう。この春この会報のコラム「海外の山」で手短かに紹介した以外、詳細な報告はどこにも載っていないし、まったく個人的な山登りだから「High Altitude Marathon」の略。ことし 2004 年ブレモンスーニヒマラヤで、9 개국 10 名のクライマーが参加して試みられた国際登山プロジェクトのことを竹内自身が命名した。「超高所耐久登山」とも称する、この連続登山からは、各国の登山家たちがチームを組んで挑戦する、ヒマラヤの新しい登山スタイルが展望できる。

■ きっかけは 01 年のナンガ

もともとは、「国際公募登山隊」

への参加だった。2001 年初夏、竹内は、ドイツのラルフ・デュイモビッツ率いるナンガ・パルバット公募登山隊に日本からただひとり参加した。アマ・ダブラムをラルフの公募隊で登ったことがある登山家の大久保由美子の紹介だったが、大久保自身は、急病で参加できなかった。公募隊といっても、実はいろいろだ、という事実を竹内はナンガで思い知った。リーダーのラルフ以下ドイツ人 9、スペイン人 3、オーストリア人 1、リトアニア人 1、そして日本人の竹内という構成で、8 人が 8 千 500 峰を複数回登っているなど皆かなりのレベル。メンバーたちは 16530 マルク (97 万円) を払い、個人装備をもって指定された日にラルビンジの指定されたホテルのロビーに行けばよかった。

「この隊はコマージュ・エクスベ

ディションじゃない。インターナショナル・チームなんだ」と、リーダーのラルフは、強調した。確かに、この山に登りたい、と思う登山家たちのために準備された「合理的な」国際隊だった。

隊の方針は、皆イーブン（平等）であること。一緒に動き、高所テントに全員で入る。「ヒロはどうしたいか？」と、竹内はいつも聞かれた。「客」ではなく、いい仲間同士になった。

マカルー、エヴェレスト登頂者でもある竹内は高所に図抜けて強く、常に先頭でルート工作に活躍した。仲間たちは「働き過ぎの日本人」への親しみをこめて「マシン」あるいは「コマツ」と呼んだ。小松製作所の重機に竹内のパワーをたとえたのだ。

6月30日のアタック当日も最終トップでラッセルを続け、仲間たちより1時間半も早くひとり登頂を果たした。10名が登頂したが、皆に「おかげで登頂できたよ」と、お礼を言われた。公募登山にはこういう楽しさがあるのか、と竹内は思った。

■「HAM計画」

2003年には、カンチェンジュンガに行った。メンバーは、ナンガの時の隊長のラルフ、前年のマナス



ラルフ(右)、ガリンダ(中)との遠征も3度目

ルでの縁でラルフと結婚したオーストリアの女性クライマー、竹内が「闘魂の」と形容詞をつけるガリンダほか竹内を含めて6人。天候が悪く、7200メートル地点までしか登れなかったが、ラルフたちとのチームワークは、さらに深まった。そうした中から2004年の「HAM計画」が生まれた。

竹内が「HAM計画」と称した連続登山は、いくつかの小さな国際チームで構成され、3つのステージに分けられる。4月上旬からネパール、チベットでそれぞれの課題にトライした後、5月上旬にアンナプルナBCに集結し、ひとつのチームとして北面を無酸素アルパインスタイルで挑む計画であった。

竹内は、今回もラルフ、ガリン

ダ・ペアとのお馴染みチームの一員として参加、手始めにXi-feng Peakという7200メートル峰に挑み、ついでシシャパンマ山西壁に転進してからアンナプルナにアタックするという連続登山を目指した。

第1ステージの7200メートル峰とシシャパンマ山西壁へは、3人のほか著名なカメラマンであるロバート・ボッシュが加わった。7200メートル峰には悪天候をぬって行動日数5日間で4月29日に登頂した。簡単なルートではなかった。

〈サミット・デイは6600メートルのC2から頂上の7200メートルの往復を12時間の往復ビンタラッセルありの、アイスクライミングありの、手袋ぬいでのドライツリーリングありの、超ナイフリッジありの、エキサイティングな内容でした。テントに戻ったときには日も暮れかけ、みんな、ヘロツヘロ〉と竹内は書いた。どんな登攀でもユーモアたっぷりに表現する竹内の持味は、他国のクライマーに好かれているようだ。

そして5月14日、こんどはシシャパンマ山西壁の「変形ダグ・スコットルート」の登攀開始。取付から一気に4人がそれぞれにロープなしに、ダブルアックスをまじえながら駆け上がり、3時間弱ですでに核心部のロックバンドに迫ったが、ラルフが

落石(落水)を受け、無念の登攀断念。壁をダブルアックスで下った。

■アンナプルナ

いったんカトマンズに戻った3人は、今度はアンナプルナに挑戦する。BCにへり入り、1日レスト。そこからアルパインスタイルで5日かけ5月29日頂上に到達した。7日目にはBCに戻り、6月1日へりでカトマンズに戻るといふ忙しさだ。

こう書くとは簡単に登ったように響くが、相当やばい登攀だったようだ。

〈実際はアルパインスタイルなりの最短4日間を予定して食料も燃料も最低限しか持たずにBCを出たものの体調やルート状況からネバって、ネバっての7日間。サミット・デイはもはや飲まず、食わず、そしてC3、C4は地吹雪で一晩でテントが半分までうずまってしまう状態で眠ることもできずの状態で、「登った」なんてもんでなく、もはやフラフラとなんとか「たどり着いた」というありさま。C2に降りてきたときには私の食料は「サッポロ一番塩ラーメン」が4分の1かけ(スープの素も4分の1)、すでに2回使用した紅茶のティーバッグが1つ、マンゴーのドライフルーツが2切れ。ガスは振ると「シャラン、シャラン……」と音がする程度……。そして、

バカバカと崩れるアイスフオールに雪崩、クレバス、落石。おまけにルートはラッセルとフロント・ポイント・クライミングが半々という強烈な中途半端」

登攀もすさまじかったが、下降は地獄だった。

へ一番ババかったのが最後、BCに戻るC1下のアイスフオール。5月末日の標高4000mの低いアイスフオールは目の前で爆破される映画のセットのようにドッカン！ドッカン！と爆音を響かせて絶え間なく崩れ続け、その崩れる間隙をぬって走って通過したり、飛び移ったりと駆け下ってまさに「脱出」。もはや「成功」などという甘美な言葉は香りもしない。モレーンの安全部に逃れ、草の香り、小さな花の香りのするBC手前までたどり着いたときラルフが「生きてるって悪くないねー」と言ったのがまさに目標の山に登ったことよりも強く感じた私たちの本音だったのかもしれない。

■GIも加える

カトマンズに戻った竹内は、ここでラルフからGI、GⅡへの登攀を誘われる。勤め人の竹内にこれ以上の休みは取れないだろう、と遠慮しながらの提案だった。こうして、石井スポーツ新宿西口店に勤務するサ

ラリーマンである竹内の帰国は、店の責任者に「さらなる休暇をお願いする」ためのものとなった。

7月はじめ東京に帰った竹内は、わずか5日の滞在で11日にはイスラマバード行きの飛行機に乗っていた。

7月25日、ラストキャンプのC3から標高差1000mの頂上へ、時には腰までのラッセルをしながら約10時間。ラルフ、ガリンダ、竹内、クライミングスタッフ兼チームドクターのピーターの4人のほかバスク人4人、オランダ人2人。彼らのハイポーター2人、さらにパキスタン人クライマー1人の合計13人がGIに登頂した。下降中、バスクの一人が滑落死する事故が起き、さすがに意気消沈するが、「HAM計画」自体は、十分な成果を収めた。8月13日帰国。長いヒマラヤの放浪が終わった。

「ぼくにとつて、4月から8月までの登山全体がひとつの登山だった」と、いま竹内は振り返る。そういう挑戦ができたことが嬉しい、とも。

連続登山をする中で、アメリカのエド・ヴィースチャーズ、イタリアのシモーネ・モロ、ロシアのデニス・ウルブコフなど各国の著名なクライマーとも交流する機会があった。いつも機関車のように先頭を行く「ヒロ」の名は、ヒマラヤで少しづつ知

られはじめているようだ。

「ラルフという存在が大きいですね。大した男ですよ」と竹内。40歳を越えたばかりのラルフ・デュイモビッツは「アミカル・アルパイン」という会社を組織、公募登山を進める一方で、自分の困難なクライミングを続けている苦労人だ。

英語なんてまったく……と言いつながら竹内は十分ヒマラヤで一流に伍しているようだ。そして、メール通信の形をとって、竹内流の文章を書く。こんな調子だ。

アンナプルナでのある日の日記。

へわあーあー！ 誰だ！ オレのクビを締めるのは!?

突然、クビを締め付けられ息がでさず飛び起きる！ 誰だ!? コノヤロ！コノヤロ！ その手を払いのけようとスリーピングバックのジッパを開こうとするがジッパのタブを手探りで探し当てられない！

息ができない！ 思い当たる節が多すぎてクビを締めているヤツの見当がつかない！

スリーピングバックの口の部分から無理やり手をねじりだして飛び起きる！・・と頭がテントの天井にめり込んだ！ このテントはこんなに天井が低いはずはない！

テントは雪にすっかり覆い尽くされ天井が低くなるほどにうずまっ

いたのだ！

酸欠だ！ 窒息だ！ 生き埋めだー！ 慌ててテントの入り口のジッパを引きおろすとブワー！と雪が吹き込む！

吹雪の中、顔を外に突き出し、ブハー！ ハー！ ハー！ ヒー！と溺れた金魚のようにバク、バクと酸素を口の中に吸い込む。

竹内のメール・スタイルのレポーターは、いくつものことを考えさせるひとつはもうすっかり古びた言葉となったが、「国際化」をまさに彼が実行していること。決して言葉に不自由しないというわけではないのに、チームの欠かせない存在となっている。国際隊への竹内の参加スタイルは、これからの世代のヒマラヤ登山に大きな示唆を与えるものだ。

ふたつめは、「コマツ」の愛称が表現している抜群の体力とテクニック、そして困難を自ら引き受ける前向きなスピリット。

そして最後に竹内の登山を理解し、休暇に比較的寛容な職場の「支援体制」がある。誰でも恵まれる条件ではないが、山登りに真摯に取り組もうとしている青年たちに希望を抱かせる要素だ。

「いまどきのヒマラヤ」を知るためには、竹内洋岳の登山から、しばらく目が離せない。

100周年記念事業の医療委員会の企画

野口 いづみ

医療委員会では100周年記念事業として、次のようなことを企画しています。

1. 『山の救急医療ハンドブック』の作成・配布

登山中に遭遇する事故や病気、その対処と予防などについて記した本『山の救急医療ハンドブック』を作成します。実践的・実用的なものとなるように図と写真を多用し、わかりやすい本にする予定です。

内容としては、「山でケガをしたとき（切り傷、マメ、打撲、捻挫、骨折、凍傷、やけど、虫・蜂刺されなど）」、「山で病気になったとき（狭心症、心筋梗塞、脳卒中、熱中症、腹痛、一酸化中毒、火山によるガス中毒など）」、「セルフレスキュー（救急蘇生法、ファーストエイドキットのリストと簡単な使用法など）」、「ケガや事故を防ぐための準備（トレーニング、ひざ痛・腰痛の対処法、サプリメントのとり方、靴擦れや外反拇指の対策など）」、「高所登山への対処（パルスオキシメータ、ダイアモックスの使用法、低酸素室の利用法など）」を予定しています。

さらに、登山者のニーズに沿った、充実したものとするために、登山の医療に関して、「山でこんなことで困った」、「このようなことについて知りたい」などについて、アンケートをしたいと思います。医療委員会のHP (<http://jacclimbingmed.hp.infoseek.co.jp/index.html>) に、「山の救急医療ハンドブック」のコーナーを設けましたので、アクセスして、アンケートにご記入ください。医療委員会HPへは日本山岳会HPからもアクセスすることができます。直接 jacmtmed@yahoo.co.jp へメールされても結構です。または、日本山岳会医療委員会宛てに、ご希望を記したお手紙を郵送されても結構です。アンケートはメール、郵送とも、年末まで受け付けています。

なお、本は、「山と溪谷社」のハンドブックシリーズとして発行されます。新書版ビニールカバー製なので、登山に携行しやすい装丁です。また、発行は2005年6月を予定しており、市販（¥980）もされます。100周年記念式典（2005年10月）出席者には無料配布の予定です。

2. 記念式典会場での展示

記念式典当日、展示会場にて医療委員会のブース

を出します。展示するものは次のとおりです。

① 山の防虫グッズ

日本の山地で使用された伝統的な防虫具を展示します。「蚊火」（腰につけて燻すもの。奈良平安時代から昭和30年代まで使用）、「火縄」（編んだ樹皮を頭に巻くもの）のほか、「だんのう」や「はんこたんな」などを展示予定です。最近ではスズメバチやマダニの刺傷を防ぐことが課題になっていますが、ハチ刺傷によるアナフィラキシー・ショックを予防するエビネフリン・キット（エビペン）が入手できるようになったので、展示する予定です。

② 『登山医学』（日本登山医学会会誌）バックナンバーの販売

日本登山医学会は1981年に発足し、毎年、「登山医学シンポジウム」を開催するとともに、機関誌『登山医学』を発行しています。会員には医療関係者のみならず、一般登山家も数多くいますので、機関誌の内容は、基礎医学から飲み水、衣類、トレーニングなどの実用的なものまで、多岐にわたります。『登山医学』のバックナンバーを展示しますので、興味のある論文の掲載号などをお買い求めいただけます。

③ その他、登山医学関係の書籍の展示販売

『登山の医学ハンドブック』や、そのほか登山、トレーニング関係の書籍を展示・販売する予定です。

3. シンポジウム開催

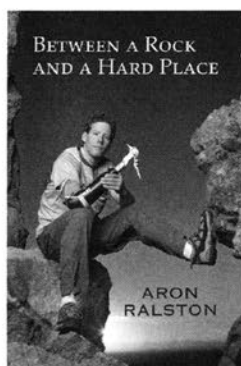
“シンポジウム：山での突然死を考える”を行います。100周年記念事業に先立って1月20日（木）18:30～20:30に東京体育館で行います（入場無料）。具体例を提示しながら、死亡原因などについて話し合う形式で行います。わかりやすく、役立つ内容ですので、医療関係者、一般登山者のほか、ツアーリーダーガイドなどにも参加していただきたいと思います。詳しい内容は、追って『山』でご案内の予定です。医療委員会のHPにも掲載していますので、ご覧になれます。

以上のような活動を通じて、医療委員会が安全な登山の遂行と、登山による健康の確立と維持に寄与できればと考えています。

海外の山

勇気ある行動

江本 嘉伸



[Between a Rock and Hard Place]

山登りに本気に取り組んだ人間なら、一度や二度は、進退窮まるような経験があるだろう。登山とは、本来そういう要素をもつ人間の行為である。アラスカに足しげく通っている友人が教えてくれた記事は、自分だったらどうするか、との問いかけを投げかけるものだった。

9月26日、アメリカの『Anchorage Daily News』は、一冊の本とインタビューで、ある登山家の絶望と勇気の物語を紹介した。当時手短かに伝えられたが、手先を自分で切り取るという勇気である。

2003年4月26日の土曜日、コロラド在住のクライマー、アロン・ラルストン(28)は、ユタ州南

東部のキャニオンランズ国立公園の狭まったゴルジュで、何気なく壁にひっかかったバスのタイヤほどのチョックストーンを払いのけようとして、立ったまま右手を落した石と岩にはさまれてしまった。

何度も手を抜こうとしても抜けない。そこで使えるほうの左腕と膝を突っ張り、岩を動かそうとした。400⁰近くもある岩はびくともしない。3度目に槌子の原理で動かそうとしたらほんの0・1¹ほど動いたが、そのためにかえってではさまれた腕の痛みが増し、やむなく元に戻した。

いったん息を整えた。汗をぐっしょりかき、のどはカラカラだった。ラルストンは背中ザックから水筒を取り出し、飲んだ。たちまち3分の1を飲み干してしまった。水は持たせなければならぬ。残りは600ccほどだった。

ラルストンは6年前、大学を首席で卒業した優秀なエンジニアであり、経験豊かなクライマーだった。彼は冷静に考えた。3つの選択がある。ひとつは、なんとかして岩から手を引き抜くこと。2つ目は救援を待つこと。3つ目は、思い切ったことに踏み切ること……。1つ目は、可能性が低いことがわかってきた。アスベ

ンの自宅は、ここから500⁰離れている上、2日前に出るとき誰にも行く先を伝えていない。彼自身どこへ行くか決めていなかったのだ。まだオフシーズンであり、通常ハイカーたちが来ない岩場だった。

解決にはドラスティックな行為に踏み切るしかない。そのことを彼はわかっていった。

夜、気温はぐんと下がった。Tシャツとパンツ姿のラルストンは、動けないまま寒さに震えた。彼はヘッドランプの助けでナイフで岩を削る作業を続けた。それが少しでも身体に温かみをもたらしたのだ。

しかし、朝までの作業の結果、あと150時間削り続けなければ、身体は解放されない、と思い知った。

日曜日だ。誰か来ないか、と期待して何度か声を出してみたが空しかった。やがて声を出すのは水を飲むのと同じように制限することにした。水は2時間ごとに口をしめらせるだけにしたのだ。

24時間が経過した。手首を切断するしかない、との思いがまたよぎった。しかし、それはそのまま自殺することなのではないか……。との思いがためらわせた。

ラルストンは、ビデオカメラを持っていた。自分を撮りながら両親へ

の「さよなら」メッセージを吹き込みはじめた。

2日目の夜、ロープを足のまわりに巻いて寒さを防いだ。10分ごとに腕時計を見て、時間の過ぎるのを待った。

3日目の夜には希望をなくした。

4日目。ナイフでいよいよ手首を切断しようと思った。しかし、今度はこのナイフでほんとうに切断できるのか、との疑問が湧いた。皮膚はともかく骨までを。

6日目、木曜日の朝。水も食べ物もなかったが、ラルストンは意識をもって生きていた。手を見ると腐敗しているようだった。切断は自殺ではない、生きることだ、と彼ははっきり理解した。ナイフを刺すと、痛みをほとんど感じない。手首から12センチほどの部分に刃先を入れた。1時間かかってスパゲッティのような白い神経の束があらわれた。切断。強烈な痛みが走り、終わった。

岩から自分の手が離され、自由に動けた時のことを「人生で最高の瞬間だった」と耐えに耐えたクライマーは語った。

1本の腕で慎重に慎重に懸垂下降をし、無事平地へ。水たまりの茶色い水をむさぼり飲んだ。ラルストンが生還した瞬間だった。

報告

10月
Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

自然保護委員会

「フォーラムIN大山・立山」 自然と人間の暮らしを考える フォーラムIN共催

本年度のフォーラムINが8月20日(金)〜22日(日)に富山県で実施された。その概要を報告する。

第1日。開会式は15時より大山町河内の播隆上人顕彰碑前で開催された。五十嶋一晃会員の司会で、まず木戸繁良富山支部長のあいさつ。

「この碑は、日本山岳会富山支部35周年を記念して上人の生家跡に建立された。高さ250センチ、重さは約3トある。石工も山岳会員であった。毎年5月に碑前で播隆祭が行われ今年で21回目となる。これからもしっかり守っていきたい。」続いて、献花そして尺八に

よる献奏、最後に富山支部お心入れの地元銘酒「立山」が注がれ、献杯が行われた。(篠崎 仁)

その夜、宿舎の白樺ハイツでは、歓迎の「越中おわら節」に続いてシンポジウム「播隆上人を語る」。黒野こうき(ネットワーク播隆代表)、前田英雄(郷土史家)、近藤信行(評論家)の3氏から、この日体調悪く欠席された穂苅貞雄(槍ヶ岳山荘経営)氏とその父三寿雄氏との2代にわたる播隆研究を軸に、新田次郎「槍ヶ岳開山」に描かれた播隆像の虚構性について熱く語りあった。(近藤 緑)

第2日。この日は立山(雄山)登山、室堂散策、有峰湖周遊の3つのコースに分かれて行動した。天候もまずまずで、登山はJACCと日本高山植物保護協会、室堂散策は山の自然学研究会、有峰湖周



碑前で挨拶する木戸支部長

遊は有峰森林文化村の方々のご協力で、すべて予定通り進行した。

夜は3か所に分宿したが、夕食後、ロジ太郎に集合してディナーショーを楽しんだ。ミュージカルの名曲を歌う斉藤恭子さんの歌唱力もさることながら、「王様と私」で司会の古田寛昭会員が突然王様に変身するという趣向に会場から拍手が沸いた。その後の佐伯史麿(芦峠寺・静寂庵主)氏による「立山曼荼羅の絵解き」も初めて聞く興味深いものだった。

第3日。称名滝、立山カルデラ砂防博物館などを見学した後、正午過ぎ解散した。参加者数121名。最後に大山町、富山支部およ

び五十嶋一晃・博文ご兄弟に心からお礼申し上げます。
(里見 清子)

事業委員会

韓国の山と岩 北漢山(三角山)山行

「より早く、より高く」まるで陸上競技のような登山は、もはや懐かしい思い出になった今日この頃です。

今回の山行は岩登り組とハイキング組があるとのこと、韓国の山に行くなら岩登りをしなければ、と言われて、ためらわずに岩登り組に申し込んだ。しかし岩登りの経験は10年も前のこと、1週間前になってハイキング組に変更してもらった。はじめは岩登り組が多いと聞いていたが、当日になるとハイキング組が増え、岩登り6名、ハイキング8名の14名と大勢で楽しく、賑やかに行くことになった。

8月26日、今回の登山計画を事業委員担当理事の知人である韓国「人と山」社・韓国登山アカデミー院長李圭泰氏らがコーディネートした関係で、白雲台山荘に入る前に、北漢山公園の管轄行政をし



変化に富んだ北漢山に大満足

ている江北区庁を訪問したところ、緑地・環境部長・江北区長始めの思がけぬ歓迎を受けた。金江北区長の話によると北漢山に登ると「気・幸・健康」のご利益がいただけるとのことだった。

北漢山の本来の名前は三角山、白雲台(836・5m)、仁寿峰(810・5m)、万景峰(799・5m)の3峰が角のように聳え立っていることからこの名前がついていて、万景とは望郷の意味も含んでいるとのことだ。情熱的に金江北区長は北漢山について説明された。別れしなに全員お土産とツツジの花酒を4本もいただき、下山後昼食に招待の約束をした。薄暮のなか頂上のすぐ下から登

山を始め、白雲台山荘につく頃には日はとっぷり暮れた。石造りとログハウス調の山荘は清潔だった。夜は山荘のご主人心づくしの韓国料理、焼肉とキムチを堪能した。

8月27日、地元の山岳会の方を待っている間に白雲台頂上まで往復約1時間、あいにくガスの中だった。

地元からはハイキング組の案内だけでも8名の婦人会員も来てくださり、万景峰まで賑やかな山行となった。このころには天気もよくなり、眼下にはソウル市内が一望でき、それは見事な景観だった。頂上直下でのランチタイムはガイドして下さった婦人会員の方の自慢のキムチ、チヂミ、五穀米その他豪華昼食弁当をご馳走になり、身振り手振りの会話が弾み楽しいひと時だった。

8月28日、時間がたつぷりあり、仁寿峰の壁にとりついている岩登り組の登攀している様子を見ながら、北漢山周回下山コースの岩場を慎重に下り麓の牛耳洞に向う。牛耳洞では全員で江北区長招待の「懇親昼食会」となった。金区長も挨拶に来てくださり、予想以上の日韓国際交流になった。

千代にも満たない山だったが、岩場あり、鎖、ワイヤーロープありの起伏と変化に富んだ北漢山を満喫した。(山縣 喜美子)

つくも会

第50回例会山行 富士山協力登山

8月22(日)、23(月)の2日間、(社)日本自閉症協会の茨城支部会員とその関係者25人の方々が富士山に登られるのを、私たちつくも会など日本山岳会15名がお手伝いをしして登った。

この富士登山の計画をJAC賛田統重理事からお聞きしたのは桜の花のころのことであった。日頃、趣味の山歩きをしているあいだに身についた脚力を何か社会的に意義のある物事に役立てることはできないか、と常々心にいだいていたこともあり、つくも会の例会山行としてお手伝いすることになった。とはいえ私たちには自閉症への知識もなく、正直なことを申し上げて不安がなかったとはいえない。山行途中にパニックのような事態が起きた場合の対応などを巡り、毎月の例会の場では口角泡を

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウエンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご用意します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ**

<http://www.fellow-travel.co.jp/>

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスウィップ渋谷ビル4F

Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300

e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp

〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F

Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986

e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催:株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員

国土交通大臣登録旅行業664号 協賛:ウエンゲン観光局・ツェルマツ観光局 後援:スイス政府観光局



創立100周年記念事業にご協力を

飛ばして議論を重ねた。

当日9時過ぎ、早朝から自閉症協会の人たちを乗せたバスを東京都庁前に迎え、合流して出発した日曜日なので渋滞することもなく11時45分に5合目に到着。広場は下山してきた人も含めてものすごい混雑で、到底全体に目配りをできる状況ではない。つくも会のメンバー1人に対し、協会の方1世帯（2〜4名）を割り振り、さらに症状が重い方のところにはサブを配置した。先頭には総リーダーの賛田さん、真ん中につくも会SLの柴山さん、そして最後尾にはLの私が付き、この3人は対象の方を特定せず機動的に必要とするサポートに当たることにした。

歩行は多少手間取りながらも順調に進んだ。しかし7合目の最上部近く富士一館の前まで来たところ1人の女性保護者の顔色がはなはだ悪くなっていた。医師でもある北海道支部の吉野会員が脈を取って少し気がかりな顔をする。「登れないこともない」との診断ではあったが、これまでの所要時間、前

途の行程を勘案し、今夜の宿「本
8合トモエ館」の姉妹宿、7合目
のトモエ館まで降りて待機してい
ただくこととした。幸い7合目ト
モエ館の人が従ってくれていたの
で、その人とつくも会の女性会員
1人に付いて降りていただいた。
7合目から8合目は長かった。

朝から今にも落ちそうな空だったが、パラパラと雨も降ってきた。

自閉症の症状により歩行がはかどる班と遅れる班で、隊列はだんだん長くなった。それを3つ以上には散らないように心がけ、手を引きながら励ましの言葉をかけて登る。突然、身体全体を背後に仰け反らせてしまうときもあったりしてまったく油断はできない。時に

は結んだ手を振り解かれることもある。しかしその手を再び差し出して求められると、コミュニケーションが不得手なためにハンデとなっているこの子が、今全幅の頼りにしているのは私なのだと自覚も高まり深い感動におそわれる。

ラストを歩く私たちが本8合目トモエ館に着いたのは19時45分を

回っていた。当然登山道は真っ暗闇の中だったが、歩いている私の心は明るいもので満たされていた。

着後、嘔吐する人も出た。時間ばかりすぎるほどかかったわけだが、よく頑張ってくれたと思う。

翌朝5時起床。雨は小降りだが風が強い。ミーティングの結果、

つくも会の5人と、前日しつかりとした足取りで歩いていた22歳と37歳の自閉症の男性が代表で頂上に向かった。頂上のお鉢に立ち、記念撮影をしただけで戻った彼ら待って7時50分下山スタート。

ざくざくの下山道のザレに苛め抜かれて1人の保護者が馬を雇った
りしていたが、11時20分怪我もな
く全員無事下山を果たした。

この日の読売新聞茨城版には「自閉症13人 富士に挑む」という見出しでこの山行が掲載され、つくも会の協力活動も賛田さんの談話を添えて「日本山岳会が同行している」と紹介されていた。

大勢の自閉症協会の人と大きく手を振り合って別れた今回の記憶に深く残る山行が、つくも会の節目となる第50回の記念山行となった。新しい仲間、来たれ。

(徳永 泰朗)

アルパインフォトビデオクラブ
第12回山岳写真展開催

アルパインフォトビデオクラブ
主催の第12回山岳写真展「心に映
る山々」が新宿野村ビル1階特設
ギャラリーで、9月2日(木)から
7日(火)まで開催された。

今年から新しい試みで、全紙、半切取り混ぜて48名の方々が出展した。毎年恒例の開催なので、楽しみにされている人も多く、連日多くの来場者があった。

この後の巡回展としては、鳥取県溝口町金屋谷伯耆国山岳美術館（17年1月より3月）、山形県酒田市酒田総合文化センター（17年7月6日より22日の開催）が決まっている。

（小田 薫）

学生部ムスタン遠征隊は、
9月18日・チブヒマール・6
650^{マイル}初登頂（4名）、19
日・セリブン・6328^{マイル}第
2登（新ルートから5名全
員）を果たし、10月3日、元
氣に帰国しました。詳細は来
月号に掲載します。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)



イラスト・宇都木慎一

第8回ミセス・ウェストン祭

金子 誠吾

8月7、8日、ウェストンの妻、エミリーさんの功績をたたえる第8回ミセス・ウェストン祭が、戸隠高原のミセス・ウェストン記念碑前で開催された。

戸隠村主催の碑前祭には、本日より、朴元鐘徳常務理事と信濃支部会員7名を含む100名近い参加者が集まった。

今年は、1904(明治37)年8月、エミリー・ウェストン(会員番号728)が外国人女性として初めて戸隠山から高妻山に登頂してから100周年を迎えた。式典が始まる直前から激しい雷

鳴と雷雨に見舞われ、大量の雨水が会場にあふれた。開会が遅れるかと思われたが、幸い式典は予定通り11時30分から始まる。英日両国の国歌吹奏、両国国旗と戸隠村旗を掲揚、来賓により次々と記念碑に献花、ミセス・ウェストンを偲び白石みさよさん作詩の「遥かなりミセス・ウェストン」と「世界に一つだけの花」を奈良ガールスカウトが献歌した。

主催者の横川欣一村長は「今年、ミセス・ウェストンが高妻山に登頂を果たして100周年を迎えた。戸隠村は来年1月、長野市と合併するが、このミセス・ウェストン祭は末長く続けて、さらに日英の友好の輪を広げて行きたい」と挨拶した。続いて日本山岳会を代表し、朴元理事からも祝辞が寄せら

れた。

式典終了後、全員が戸隠ガールスカウトセンター食堂に移り、奈良ガールスカウト手作りの料理で昼食会が開催された。ガールスカウト代表から「雨で野外の昼食会が中止となりましたが、ゆつくりと召し上がってください」と歓迎の挨拶をされ、手作りのおいしい料理に大満足。

この後、センター講堂での記念講演は、中島豊氏が「山歩きを楽しむもう一つの山の楽しみ方」と題し、自分なりの地図を作り山登りを楽しんでいること、県警で山

岳パトロールをされていた時の経験談などを話された。

地元会員による懇親会は戸隠小屋へ移動し開催され、早乙女会員から謝辞と乾杯、佐々木会員の歓迎の挨拶と続き、全員で戸隠越水ヶ原に山小屋を作り、戸隠を第2の故郷として愛され、毎年ミセス・ウェストン祭に参加してご指導をいただいた故小倉茂暉元副会長の冥福をお祈りした。

農大OBの朴元理事の自己紹介と同大先輩の早乙女会員との回顧談で時を忘れ、会員の近況報告など山麓清談が続き、全員満足しな

おれ にんげんたち

——デルスー・ウザラーはどこに——

黒澤明が感動したように、デルスーに魅かれて



探検家アルセニエフの生涯とその足跡をウスリーのタイガにたずね、デルスー像の検証から、二人の友情、自然と人間のかかわりを豊富な資料を駆使した巧みな筆致で探究する。

岡本 武司 著
四六判 220頁 1,890円(税込)

カラコルム・ヒンズークシュ 登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入
385ページ B全判地図13葉
宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・
雁部貞夫 共著 ・カタログをご請求下さい

◎好評発売中!!

34,650円(税込)

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

がら散会となった。

8日は快晴のなか記念登山が行われ、一般参加者は地元ガイドの先導により、高妻山、飯綱山、植物園周辺散策の3コースに別れ、ウエストン夫妻の高妻山登山に想いを馳せながら戸隠高原の自然を満喫した。

フォスコ・マライーニさんの死去を悼む

斎藤 建治

私がマライーニさんに初めて会ったのは昭和14(1939)年の8月だった。当時甲府商業の山岳部長をしていた私は生徒十数名を引率して富士登山を終え、大月駅から中央線に乗り込んだ。偶然にもその車両で登山姿の異国の青年と一緒にあった。山好きな2人は大いに山の話に花を咲かせたことと思うが、昔のこととて記憶がない。

ただ、彼はこれから岳友が前穂で遭難したので、その救助に行くところだと語ったことだけは覚えている。そして名刺を交換して甲府駅で別れた。その時初めて彼が

イタリアの留学生として来日していることを知った。

私は昭和17年、甲府商業高校から秋田の大館中学に転じその翌年退職して、外務省の外郭団体である国際学友会に就職した。そこで古い学友会の事業報告書を見て、学友会が独、伊の両国と学生の交換、招致の事業を行っていることを知り、マライーニさんがストラミジョリ女史と第1回イタリア交換学生として来日していることを知った。日本からは野上素一元京都帝大教授が渡伊している。

戦争中の駐伊日本大使であり元本会会長だった故日高信六郎さんの紹介で、私は昭和33年に日本山岳会に入会したが、マライーニさんはすでに昭和29年に入会していた。そして昭和63年に名誉会員に推挙されている。日高さんはギド・レイなどイタリアの登山家を日本に紹介している。

昭和57年の年次晩餐会で40年ぶりにマライーニさんに会い、旧交を温めた。その時記念に配付された一合栞にイタリア語と日本語で「Grande! 学友会の友人 マライーニ フォスコ Fosco Maraini 1936-1982」とそいじにあったボール

ペンで書いて私に渡された。文字は少しにじんんでいた。私は戦災で戦前のものはすべて失ってしまったので、この栞は大切にし、書斎に飾っている。

過去にイタリア山岳会通と言われた日高、牧野の両氏がいたが、今またマライーニさんを失う。イタリア山岳会と日本山岳会の連携はどうなるのであろうか。

日本および日本人をこよなく愛した名誉会員フォスコ・マライーニさんの冥福を心から祈ります。

マライーニ写真展の追憶

杉本 誠

昨年9月にフィレンツェ市内のマライーニ邸を訪問し、氏の体調に不安があることを4月号の本欄で報告したが、回復されなかった。

私は『山岳』第84年(1989年)に「写真展を通して見るフォスコ・マライーニの世界」を書いたように、氏とはおもに写真を介して交流を深めてきた。

その写真展とは、同年夏に豊田市で第1回展を開いた「東洋への

ロッジ泊まりで楽しむ ネパール・ヒマラヤ・トレッキング

～もっと快適にヒマラヤの山麓で泊まり、
白銀に輝く高峰群の展望を楽しむ山旅～

- アンナプルナ方面とエベレスト方面に3コース
- 9日間から12日間まで、秋から晴に催行します。

国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 日本コンドール協会
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

道」を指す。準備にあたって私は10日間フィレンツェ市に滞在し、マライーニ邸に通って氏と2万枚余の写真をもとに、「南イタリア・中央アジア・日本」の3部構成にまとめる仕事をした。計251枚になった。

これは写真と一緒にマライーニ氏の足跡を追体験するに等しく、思えば何という恵まれた毎日であったことか。

たとえば氏が隊長として参加した1959年のヒンドウ・クシュ、サラグラール峰(7349m)、8月24日に初登頂)遠征では、恐る

べき氷なだれの話とともに、チトラル盆地の小さな谷に住む2千人足らずのカーフィル人について、その豊かな表情、宗教、習俗などを、現地で見るように語られたのである。

そこには大きな自然と小さな人間の存在を、いつも重ね合わせて考えていた氏の終生変わらぬ姿があった。

この写真展は、少し時間はかかったが、氏にゆかりの深い札幌、京都、豊田の3市で、ご健在のうちに開催できたのが、何よりのことと思う。251枚の全作品は豊田市美術館が所蔵している。

短歌

神室の尾根にて

大橋 克也

陽に灼けし腕はまだらに脱皮せり
妨ぎるものなき尾根を伝いて

今はただ憩わむという友の手に水
を分ちて越えし尾根視つ

今朝漬けし胡瓜の水気むきばりて
遙か越えきし尾根ふりかえる

俱知安で100年前に 発足した蝦夷富士登山会

高澤 光雄

明治38年7月12日に俱知安村で蝦夷富士登山会が日本山岳会に先立って発足している。羊蹄山西麓を通る北海道鉄道(函館―小樽間)の開通を機に、俱知安郵便局長の河合篤叙(後に山岳会に入会、北海道で最初の会員となった)が、乗客と羊蹄山登山者の増加を図って蝦夷富士登山会を創立。

その経緯は『山岳』97年(2002年)に「北海道から最初に入会した河合篤叙と蝦夷富士登山会」と題し、河合の写真と当時発売していた絵はがき3葉を掲載して発表した。

来年は100年の記念すべき年であり、『山岳』を補う意味で俱知安郷土研究会会長・武井静夫氏のご厚意で、貴重な当時のアルバムを拝借して掲載することになった。

蝦夷富士登山会幹事で実務を担当していた高山万次郎は、半月湖に登山会事務所臨湖亭を建て、シーズン中は常住して登山者の宿泊

の便や案内に尽力した。会長の河合が大連に去ってからは会長職を代行。明治45年4月のレルヒ蝦夷富士スキー登山では、裏方のリーダーとして登頂に導いた。大正10年に河合が俱知安に戻り、蝦夷富士登山会の再建を協議中であつたが、残念ながらその年に56歳で急逝した。

その後、子息禎亮が幹事となつて登山道整備や山小屋の管理に携わっていたが、太平洋戦争が始まって登山者が激減、登山会は昭和17年11月に解散した。

ミッテルレギ・アイガー 中間地点からの退却

松隈 茂

2004年8月7日の15時30分にアイスメア駅でガイドと会う約束であつたが、65歳の私は先に行つて待とうとグリーンデルワルト駅近くのホテルを早めに出た。

私のガイドのイエティ(ベルト・ヒューテマツへのニックネーム)とは4年ぶりに会つた。彼は身長190センチ、43歳で、すぐに私を見つけ、私の装備を点検した。

二人のアキラ、 美枝子の山

平塚晶人

Hiratsuka Akihiro

伝説のアルピニスト

『氷壁』のモデル松濤明、

第二次RCC創設の奥山章
をつなぐ女性と山の戦後史



定価2200円

文藝春秋

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23 Tel. 03-3265-1211

マナスル登山隊員最終募集 事業委員会

事業委員会では2005年、マナスル(8156m)に登山隊を送ります。隊員募集を11月末で最終とします。現在までに70歳から40歳台の年齢層の方が応募しています。女子会員も歓迎です。

あわせて、マナスルベースを訪問する支援トレッキング隊の募集もしております。

手紙またはFAXにて下記までお申し込みください。電話受付は一切いたしません。

*登山日程 平成17年4月5日～6月10日
記

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-1-3
西尾ビルG・B内 Fax 03-5273-4823

事業委員会シニア登山隊本部 朴元鍾徳宛

イエティが格子戸を開き、内側のスイッチを押すと明かりが一斉に点灯した。この下り勾配のトンネルは出口に近づく下部全面が氷結して非常に滑りやすく、ピッケルを使った。

私が見先でアイガーの南壁沿いの雪原を登り下りし、岩壁の下で「ここが最初のロッククライミングで、素手で登る」と言った。私がセルフブレイするとイエティは岩にねじ込まれたステンレスボルトのフックにヌンチャクやカラビナを付け、ザイルを通して登った。出発から2時間ほど後の18時05

分にミッテルレギ・ヒュッテに着、イエティが管理人のレジーナに紹介した。ここに泊まる22人の半数ほどが19時から2番手の食事、まずビールで乾杯し、手の平ほどの厚切ハムなどフルコースのような食事をたっぷり1時間かけてとった。

21時に3フロア寝室の最下段に用意された寝袋で、イエティと枕を並べて寝たが、1時間ほどすると強烈な雷がやってきた。また雷が屋根を打つ音がしばらく続いた。8月8日4時半に太陽光発電装置による照明が点灯され起床、す

ぐ食堂で朝食が手際よく出された。私とイエティはアンザイレンして5時45分にヒュッテを後にした。すぐに両側が切れ落ち、幅が0・5mほどのミッテルレギ岩稜を、イエティのわずか2歩後ろから慎重に進んだ。稜線上の雪渓に到達するとやっと岩角を手でつかむのが可能になった。2番目の固定ロープは支点が少なく、傾斜も急で両手でつかむと肩まで上がり、腕力が必要とした。

ヒュッテを出て2時間30分ほどでグロッサツルム(大塔)の下部、標高3650m地点に到達した。ヒュッテの標高3355mと、アイガーの標高3970mの中間地点であった。イエティが「あの黒い雲は天候の悪化を示している。シゲルはどう思うか」と尋ねた。「安全がベスト。リタイアしよう」と答え、下山にかかると、霧に囲まれ、足下の北壁側に馬蹄形の虹が見えた。私がトップでクライム・ダウンにかかるのと我々の最後のパーティーも下山を始めた。ヒュッテに戻り、テラスで紅茶を飲む間に天候は刻々と変わり、今朝出発した18名全員が途中から帰還した。

K2登頂50周年の 関連情報

大森 久雄

会報711号、712号と続けてK2が話題になっていたので、関連情報を。

8月下旬、シャモニの帰りにモン・ブラン・トンネルを抜けてイタリアのトリノへ。当地にある山岳博物館では、イタリア隊のK2 50周年を記念して当時の写真展が行われていた。展示資料のなかには、隊長デジオの報告『K2登頂』とそれに関連する本やポスターがあり、あかね書房版(近藤等・訳)も並んでいた。

館長のアルド・アウデューイオ氏(会報621号参照)は所要外出中で会えなかったが、記念切手(色刷り)ができていたので紹介する。



「50 ANNIVERSARIO
SPEDIZIONE ITALIANA
CONQUISTA DEL K2」とある

Climbing & Medicine · 38

高山病と高所反応

中島 道郎

過日、日本旅行医学会の先生方と高山病についての意見交換をした。彼らは、“Sea Sickness”は船酔いと訳されているのだから、“Acute Mountain Sickness”は「急性高山病」ではなく、「山酔い」とすべきだと主張する。しかし、Sicknessの本義は気分のすぐれない状態全般をさしているのであって、Sickness=酔いではない。その証拠に、二日酔いの英語はHangoverと言う。彼らには単なる高所反応と高山病との区別がついていないのだ。

高度上昇に伴って空気は希薄になり酸素分圧は低下する。足りない酸素を補充しようと人は無意識に過換気をする。それにより、体内の二酸化炭素は過剰に排出され、低二酸化炭素血症、すなわち呼吸性アルカローシスに傾く。これにより、脳

血管は収縮し、脳貧血をひきおこす。これが『高所反応』で、山に登ってふらついたり、むかついたりする原因である。それを山酔いと呼んでもよいが、本質は単なる低酸素換気応答、すなわち正常なる生理現象であって高山病ではないことをしっかりと認識していただきたい。過換気だから、安静にできるだけゆっくりと呼吸するように心掛けていればやがて解消する。

他方「急性高山病」であるが、ここにいる急性とは、「慢性高山病」なる疾患群に対比したものであって、俄かに発症する、という世間一般の意味ではない。本症は高所に到達して数時間（大抵6時間）後に始まる。頭痛を必発とし、ほかに消化器・神経・その他の諸症状を伴う不快な状態のことであって、その本態は脳の軽度の浮腫である。これが重症化したのが高所脳浮腫であるが、両者は程度の違いであって本質は同じものである。最良の対策は下山である（つまり、6時間以内に下山すれば事は起らない）が、それが困難ならば、とにかく“動かない”こと。2～3日で症状は消失する。これが高所順応である。もしダイアモックス服用・酸素吸入・ガモフバッグ治療などが可能なら、何もしないより効果は早い。

図書受入報告 (2004年8月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
井上重治	カラコルム・ヒマラヤに魅せられて	635pp/21cm	遊人工房	2004	著者寄贈
小嶋誠孝 他	鈴鹿・大峰・大台ヶ原(ヤマケイYAMAPシリーズ No.13)	175pp/21cm	山と溪谷社	2004	出版社寄贈
早川輝雄 他	八甲田・八幡平・鳥海山(ヤマケイYAMAPシリーズ No.15)	175pp/21cm	山と溪谷社	2004	出版社寄贈
町田尚夫	奥武蔵をたのしむ	254pp/18cm	奥武蔵研究会	2004	発行者寄贈
立山カルデラ砂防博物館(編)	立山カルデラ砂防博物館 常設展示総合解説	141pp/30cm	立山カルデラ砂防博物館	1998	発行者寄贈
中田敏著作集刊行会(編)	東北の大地からの提言:ある自然保護運動者の歩み	288pp/19cm	ぶなの木出版	1992	篠崎仁氏寄贈
中谷實悦郎	山の記憶	608pp/22cm	白山書房	2004	出版社寄贈
関西学院大ワンダーフォーゲル部(編)	大長山遭難事故調査報告書	81pp/30cm	関西学院大ワンゲル部	2004	発行者寄贈
Colonel Rajendra Singh (ed.)	The Lure of Everest: An Account of Indian Army Everest Exp.	160pp/32cm	Army Adventure Wing	2003	大森弘一郎氏寄贈

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーや
エクスペディションのアレンジまで。充実
度が違う「旅」のプランニングをこころがけ
ています。山旅などあらゆるジャンルを取り
扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック

(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030

大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111

名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



英国・エヴェレスト財団と「チベットのアルプス」登山の幕開け

中村 保

英国のエヴェレスト財団=MEF (Mount Everest Foundation) から2003-2004年次レビューが届いた。MEFはアルパイン・クラブと王立地理協会が合同して設立した財団で、1977年以来、探検的な踏査・登山やパイオニア的なアドベンチャー、フィールド・ワークに助成金を出している。対象は毎年30~40件、合計で400~600万円規模である。現在の会長は、念青唐古拉山東部に早くから目をつけボニントンと組んでセブ・カンリに挑戦したチャールス・クラーク博士である。MEFの最新のレポートは、「チベットのアルプス」登山の本格的な幕開けに近いだろうと漠然と思っていた私の予感が的中していることを裏付けている。クラーク博士の会長報告の一部と助成金のここ5年間の傾向を紹介する。

「近年停滞が続いていた中国・チベットの登山が再び活発になってきた。四川省の未踏の6000m峰に目をつけて、英国の強力なパーティーが入り、そのうちの1隊がグロスベナー (6376m) を北壁・西稜にルートをとって初登頂に成功した。驚いたことに、ベース・キャンプの周りには100人以上の冬虫夏草採りがきいていたという。(中略) 我われは、未踏峰、なにかんづく念青唐古拉山東部の写真を提供し続けているベテラン探検家の中村保氏 (アルパイン・クラブ会員) に負うところが大きい。」

エヴェレスト財団助成金の最近のトレンド

	2004	2003	2002	2001	2000
中国・チベット	10	7	5	1	2
* ()	(8)	(3)	(3)	(1)	(1)
グリーンランド	5	9	2	9	6
USA・カナダ	5	5	5	7	5
中南米(ペルー)	5	4	1	1	0
中南米(その他)	5	5	4	10	7
インド	5	2	5	5	2
ネパール	3	2	0	4	2
パキスタン	2	1	0	1	4
キルギスタン	3	2	4	1	1
南極	0	1	2	0	1
その他	1	1	5	2	3
合計	44	39	33	41	33
助成金合計(万円)	420	360	430	500	610

* () は「チベットのアルプス」東チベット念青唐古

拉山東部・カンリ・ガルポおよび横断山脈

注記：補助金の対象は英国とニュージーランドの隊のみである。

2004年の「チベットのアルプス」における8件の遠征は次の通り。

- 1) 四姑娘山主峰(6250m) 北壁あるいは西稜の新ルート登攀
- 2) 念青唐古拉山東部、チュウチェボ(6550m) およびビルタソ(6691m) の探査-NZ隊
- 3) ミニヤ・コンカ衛星峰Eコンガ (Mt. エドガー 6618m) の新ルートによる登頂
- 4) 四川省大雪山山系・海子山(5820m) の初登頂
- 5) 雲南省高地における住民の高地順応調査
- 6) 四川省ジャージンジャボ山塊探査および夏塞(5833m) 北壁ルートによる初登頂
- 7) 四川省チョンライ山系・四姑娘山周辺の岩峰登攀
- 8) 念青唐古拉山東部カジャチョ(6447m) 初登頂(北東壁経由) —ミック・ファウラー

これらの情報からヒマラヤの東の最深部にクライマーが入るときが到来していることが分かる。英国・ニュージーランドのみでなく、アメリカからも入ってくる。アメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集長ジョン・ハーリンと著名な冒険家マーク・ジェンキンスは念青唐古拉山東部八松湖の北の未踏峰に2004年の秋に再挑戦する。アメリカにはカンリ・ガルポへの計画もある。新しい登山の黎明期を迎えている。とはいえ、東チベットには数えられないくらい未踏の6000m峰が残されている。容易に登り尽くせるものではない。登山史上最後のフロンティアとしてあり続けるだろう。

年末年始特集

ロッジ泊で歩く 9日間
ランタン谷ヘリトレッキング
12/28(火)~1/5(水) 428,000円

台湾最高峰 4日間
玉山 (3952m) 登頂
12/30(木)~1/2(日) 178,000円

ロッジ泊で歩く 9日間
ブーンヒルトレッキング
12/21(火)~29(水) 328,000円

マレーシア最高峰 6日間
キナバル山登頂 *追加企画*
12/28(火)~1/1(土) 243,000円

ゆつたりキリマンジャロ登頂 13日間
ンゴロンゴロ自然保護区サファリ
12/4(土)~16(木) 608,000円

山旅専門旅行社 **アミューストラベル株式会社**

〒160-0022 東京都新宿区新宿2丁目6-4 KN新宿ビル11階

TEL: 03 (5919) 1188 FAX: 03 (5919) 1189

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆「上高地山研」年末年始のオープンについて 山研運営委員会

建物のメンテナンスのため今年も年末年始に委員が山研に入ります。この期間は仮設トイレ、仮設の排水等を完備させてオープンしますので、会員の利用(宿泊)が可能です。

期間 平成16年12月30日から平成17年1月3日まで
申込 11月末までに住所、氏名、会員番号、電話を坂本正智宛(TEL・FAX 042-373-3238)

*申込者に利用の詳細を送ります。
◆スキー懇親会のお知らせ

事業委員会

恒例のスキー懇親会を開催します。
期日 平成17年1月8日(10日)
費用 2万円程度を予定
場所 乗鞍高原

集合 現地集合・解散
定員 30名

*詳細は次号に掲載いたします。

◆東丹沢の紅葉をめぐる山行

ゆきわり会

東丹沢の軽登山と宮ヶ瀬湖畔の紅葉をめぐるハイキングです。

期日 11月13日(土)、14日(日)
行程 8時・本厚木駅集合(バス)
9時半・僧坊前、11時・経ヶ岳 14時・仏果山 15時・仏果山登山口 広沢寺温泉・懇親

会費 約1万5千円(宿泊懇親会)
申込 氏名、住所、電話、メールアドレスを記入し、①山行②懇親会③宿泊の参加を区分して10月31日までに池谷健宛(TEL 042-366-2485) ken1009@dt.dio.ne.jp

◆岩切峯泰個展

世界の「山の風景画」を中心に、油彩画と水彩画40点余りを展示します。

期日 11月8日(11時)〜18時30分
会場 「銀座渋谷画廊」銀座7-8-1 渋谷ビル2F (TEL 03-3571-0140)

会員異動

物故

大谷 優 (5122) 04・8・10
田村 宏明 (6199) 04・8・25

退会

徳永昌弘 (10810) 東九州

改名

山下弥生↓坂上弥生(13312)

ルーム目誌 8月

2日 総務委員会
3日 アルパインスケッチクラブ
4日 山岳地理クラブ
5日 事業委員会
6日 自然保護連絡会
7日 三水会
8日 山想倶楽部
9日 アルパインスキークラブ
10日 アルパインスケッチクラブ
11日 つくも会
12日 自然保護委員会
事業委員会
高尾の森実行委員会
九五会 00会
アルパインスキークラブ
理事打合せ会
山遊会
理事打合せ会

8月来室者28名

◆編集後記◆

●久し振りに出かけた学生部の遠征隊が、目標を達成して無事帰国しました。首都圏4大学の5人の学生だけで、ムスタンの未踏峰の初登頂と新ルートからの第2登を果たしました。会員の高齢化が問題となる中での若い人たちの活躍、来月号で詳しくお伝えします。

●会報「山」の編集実務をほぼ10年間にわたって担当していただいた奈良原町子さんが、10月8日ご逝去されました。私も3年前に会報の担当になり、本当にお世話になりました。まだ64歳の若さでの急逝、ご冥福をお祈りいたします。●何回かお願いしていますが最近また「報告」(東西南北)の原稿が長くなってきました。色々な思いがあるとは思いますが千字を目安にお願いいたします。(今村)

日本山岳会会報 山 713号

2004年(平成16年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 今村千秋
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社